



2011年3月30日放送

漢方医人列伝「奥田謙蔵」

あきば伝統医学クリニック 院長 秋葉 哲生

奥田謙蔵は1884年（明治17年）に四国丸亀の漢方医、奥田光景の次男として生まれました。

奥田家は医家の家系で、代々高松藩医として務めていました。謙蔵の父方の祖父である三井公圭氏は吉益家において漢方を学び、また長崎に遊学してシーボルトの塾にも学んだ篤学の士であったと伝えられています。すなわち、漢方としては古方派で、その中でも吉益流の学統に属していたことが判ります。

1915年（大正4年）に日本医学専門学校を卒業した謙蔵は直ちに故郷の四国に帰り、父光景氏のもとで家の学問である漢方医学を学びました。昭和9年に書かれた文章が現在も残っておりますが、そのときには『傷寒論』、『金匱要略』はもとより、『素問』、『靈樞』、『黄帝内経』、『難経』、『本草綱目』、『温疫論』（明末清初・呉有性、1642年成）、『十四経發揮』（元・滑寿、1341年成）などを用いて学んだと述べております。通常古方家とはだいぶ異なる教育を受けていたことが判ります。

奥田謙蔵は厳密な傷寒論解釈で今日も知られているわけですが、それは彼一代のものではなく、江戸時代以来の累代の古方派の、いわば“家の学問”、すなわち家学であったことは注目されるべきであります。

したがって、謙蔵の漢方医学には江戸時代以来の一貫した家学としての古方派の見解が反映しているわけであり、明治になって江戸時代の漢方の歴史が断ち切れ、代々の

漢方家という存在はないのだと説かれる方がありますが、奥田謙蔵に関する限りはまぎれなく江戸の漢方家の家系に育ったのであって、まったくの誤解であります。

明治時代の医制の制定により漢方医学は正式な医学とは認められなくなりましたが、新制度のもとで医師免許を取得し、「漢方医学を滅ぼしてはならない」と警鐘を鳴らす医師が現れました。1910年（明治43年）に刊行された『医界之鉄椎』とその著者である和田啓十郎でした。石川県の七尾でそれに呼応したのが湯本求真であったことは、前回お話しいたしました。

奥田謙蔵は湯本求真の8年後に生まれましたので、医師になった大正初めはまだ漢方を旧弊なものとして見做す厳しい時代でありました。医師免許取得後、実の父から薫陶を受けた奥田先生は1918年（大正7年）に上京し、東京府小河内村の村医となって漢方専門で勤務して大いに実地の訓練をしたそうであります。

さらにその数年後の1924年（大正14年）に、東京本郷の湯島新花町にて加藤玄伯医院として加藤氏と共同で漢方を標榜して開業いたしました。このころになると、奥田謙蔵の名前は次第に漢方界に知られるようになっていたようであります。その証拠には、1927年（昭和2年）に出版された中山忠道の『漢方医学の新研究』には、全国の漢方家を挙げた中に奥田謙蔵の名前が加えられております。

奥田謙蔵の最初の論稿は、1926年（大正15年）の『皇漢医学の治療定則に就て』であります。これは患者向けの解釈文とのことでありますが、内容は専門家向けとしても通用するもので、先生は西洋医学と比較しての漢方治療の方法論を展開しております。その論旨は明快で、方証相対を謳うものであることから吉益流に基づく考え方であることがわかります。

さらに注目されるのは、この翌年の1927年（昭和2年）に刊行された湯本求真氏の『皇漢医学』第1巻に跋文を寄せていることでもあります。この跋は文語文で書かれておりまして、まことに堂々とした漢方医学論であります。二人は個人的にも親しかったのですが、湯本求真は奥田謙蔵をみずからの後継者と見做していた節があります。奥田謙蔵に跋を依頼したのも、かつて和田啓十郎が湯本先生自身に『医界之鉄椎増補改訂版』の序を書かせてくれたのと同じことを、8歳年下の奥田先生に勧めた時の漢方界に送り出したと見做されるからです。

奥田先生の著作で刊行された本となったものには三種あります。一つは、『漢方古方要方解説』〔これは1934年（昭和9年）に『皇漢医学要方解説』として出版されたものを改題したもの〕、『傷寒論梗概』、最後が『傷寒論講義』であります。いずれも今日オンデマンド版で入手することができます。

先に述べましたように、先生は家の学問としての傷寒論医学を伝えられた方で、奥田先生以外にはない傷寒論理解が随所に折り込まれております。また、漢学を得意とされた先生の条文の読み方にも味わい深いものがございます。ご一読をお勧めするゆえんです。

先生のもとには多くの門人が集いました。先生は大正末年から東京にお住居でしたので、

その頃からの門人と、1953年（昭和28年）に千葉県市川市に転居された後の門人の方々が居られました。

前者の代表は和田正系氏でしょう。氏は『医界之鉄椎』を書かれた和田啓十郎氏の子息であります。堤辰郎氏、私の師匠の藤平健先生もこのグループに含まれます。後者には千葉大学医学部の関係者が多く、伊藤清夫氏、小倉重成氏、鍋谷欣一氏、根本幸一氏、千葉東弥氏など、いまもご活躍の方々が含まれます。奥田先生の学統は62年前の敗戦後の日本漢方の牽引役として多くの漢方医家を輩出いたしました。現在の富山大学大学院医学薬学研究部和漢診療学講座、千葉大学大学院医学研究院和漢診療学講座もその流れにあります。

奥田先生の診察された記録はほとんど残っていないので、先生の処方傾向をうかがうすべはありませんが、先生が小河内村の村医として診察した経過が、1937年（昭和12年）の『漢方と漢薬』第4巻第5号に「懐旧録」という記事になっておりますので紹介しましょう。

木防已湯証治験

堀○力○ 二十五歳、女。

患者は、産後数日の頃から既に軽度の心悸亢進と下肢の浮腫とを自覚してゐたが、赤貧の為に医治を加へず、其儘放任して置いた所、一日突然全身に水腫を現はし、煩悶苦惱殆んど死せんとするの状態であるから、直ちに往診を乞ふとのことである。

往って見ると、顔面、軀幹、四肢尽く腫満し、眼瞼は浮腫の為に殆ど上下相接し、腹は太鼓の如く、呼吸促迫し喘満喀、（ママ）血し、臥すことを得ずして、辛ふじて積み重ねたる布団に凭り掛つてゐる。

脈は大体沈にして緊、頻数乱調、且つ時々結代がある。口唇は既に紫藍色を呈し、舌は苔なきも、稍や青色を帯びて乾燥す。其他、僅かに心下痞堅を認むるの外、腫満の為に爾余の腹証を詳かにすることは出来なかつたが、以上の証及び腹診上の所見に拠つて、高度の僧帽弁不全閉鎖に由る代償機失調なることを診断し得た。

先づ危篤を告げて、直ちに家方回生散一、○を投じて帰り、続いて木防已湯に茯苓を加へて五貼を与へ、これを明朝までに連進するやう命じて置いた。時に午後四時頃であつたと思ふ。（*回生散：諸般の虚脱症状を治す。熊胆、麝香、葛粉からなる。奥田家方）

翌朝、便の者が来て、薬效大に顕れたるを以て、再び往診を乞ふとのことである。往って見ると、昨日の全身腫満者は、今日全く別人の如き瘦せ人と変わり、水腫去り、喘満、喀血全く止み、呼吸静穏、脈整調にして、患者は褥中より頻りに小生に再生の恩を謝した。小生も、実は此の奇蹟的薬效に驚いた。そこで服薬後の模様を看護の者に聞いて見ると、夜に至つて始めて第一回の排尿があり、次で又直ちに第二回の排尿があつたが、此度の排尿は、共状瀉の如くにして容易に止まず、それより殆んど数限りなく排尿し、漸次に水腫去り、苦悶消え、今朝に至つて斯の如くに最早や全快したかと思はるゝやうになつたとのことである。

尚ほ前方を持続すること三日にして、後、苓桂朮甘湯合柴胡桂枝乾姜湯に転方、通計三

週間にして治癒休薬した。

若干の家方薬を用いておりますが、基本は腹候と症候に基づく方証相対による治療で、古方派の特徴がよく表れております。

奥田謙蔵は1961年（昭和36年）3月9日に78歳で惜しまれつつ亡くなりました。お墓は鶴見の総持寺にあります。なお、市川東菅野にありました先生の旧宅は、2003年（平成15年）5月の養女サイ様の御逝去後の8月に取り壊され、残念なことに残っておりません。